

子どもの知覚環境研究の展望

——メンタル・マップと地理的原風景——

寺 本 潔

Kiyoshi TERAMOTO

(地理学教室)

1. は じ め に

子どもが周囲の環境をどのように知覚するかという問題は、すぐれて地理学的なテーマである。しかも、具体的な地理的環境の中で子どもが生活し、自らの知覚世界を形作っていく様子は、野外科学としての地理学にとって格好の研究課題と言えるだろう。近年、人文主義地理学 (Humanistic Geography) がその力を増し、日本でもしだいに実証的研究が蓄積されるにつれ、子どもの知覚環境を研究テーマに据えた研究事例がいくつか見られるようになった。子どもにとって、周囲の空間や景観の「意味」を探ろうとする研究の視角は、現象学のそれと共通する面が多く、子どものメンタル・マップの構造解明に新たな局面を提示するに至った。

このような研究の流れは、欧米においては1960年に刊行されたケヴィン・リンチ著作の『都市のイメージ』¹⁾以降、都市計画の分野で部分的に始められ、1977年にユネスコによって出版された『青少年のための都市環境 (Growing up in Cities)』(K. リンチ編著)²⁾に至るように都市空間に生きる子どもの生活空間研究が建築学サイドで進められてきた。もちろん、一方で環境心理学や行動地理学からの関心も高まるにつれ、『環境と行動 (Environment and Behavior)』(1973年創刊)という雑誌も定期刊行し始め、同年、『環境の空間的イメージ——イメージ・マップと空間認識』(ロジャー・M・ダウンス, ダビッド・ステア共編)が企画発行された³⁾ことで一気に、人間の知覚環境への関心が高まったと言えよう。認知表象、空間選好、地理的定位、認知距離、世界像形成などに関する経験的データも蓄積されるにつれて、環境知覚の発生や認知構造の形成過程についても言及されるようになり、子どもの知覚環境研究の重要性が指摘されるようになってきた。

他方、現象学的地理学の旗手と呼ばれる中国系アメリカ人、イーフー・トゥアン (Yi-Fu Tuan) の著になる『トポフィリア——環境に対する知覚・態度・価値についての研究』(原著1974年)⁴⁾や『空間の経験——身体から都市へ』⁵⁾ (原著1977年)の寄与するところも大きく、幼い子どもに対する感情と観念についての地理学者の関心も高まりつつある。建築学や環境心理学、地理学からのこうした知覚環境論の背景には、過度の人間不在の生活環境に対する批判が横たわっていたし、構造主義や意味論、記号論の思想の隆盛が支えていた。子どもの知覚環境研究も、巨視的に見れば他分野 (幼児心理学や文化人類学、人間生態学、児童社会学など)における子ども研究の流れと軌を一にし、子どもの知覚世界

を大人のそれとは一旦切り離して、独特な環境世界に生きる者として捉えようとする立場に立っている。

本稿では、主にわが国の地理学における子どもの知覚環境研究についてレビューするが、英米における研究動向⁶⁾や関連分野における子ども研究については他日を期してコメントを加えたいと考えている。

2. 子どもの知覚環境論に関する近年の動向

(1) 地理学の場合

わが国の地理学界において、子どもの知覚環境研究がどのように行われてきたか、についての詳細は、次章以下で述べるのでここでは最近の研究動向が生み出される以前のいわば前段階の先行研究について整理しておきたい。

前述したように、欧米の研究動向の影響も受け、わが国の地理学界においても人間行動や環境知覚の地理学的パターンに関する関心が1970年代後半より高まり、メンタル・マップという言葉もグールドらの著作が翻訳出版されたり⁷⁾、景観論や地理思想史への積極的なアプローチも見られるようになり⁸⁾、人間と環境の地理学的関連への興味・関心が集まるようになった。しかし、当初メンタル・マップ研究は計量的手法による成人を対象とした実証研究の色彩が強く、子どものメンタル・マップ研究の進展には余り寄与しなかった。

一方、景観認識研究や地理思想研究の分野においても子どもの知覚環境については度々、言及はされていたものの、具体的なフィールドワークに基づいた事例研究はなかなか現われてこなかった。わが国においては、子どもの空間認識研究として、むしろ地理教育の分野における研究が多く先行研究として積み重ねられており、地図理解を進展させるためである⁹⁾とか、野外観察指導を効果的に行うための基礎研究¹⁰⁾として実施されていたに過ぎなかった。したがって、そこには個体発生としての子どもの知覚環境形成や空間行動の生態地理学的見地¹¹⁾からのアプローチは感じられず、当然、子どもの居住する当該地域の環境との関連が著しく等閑視されていた。

しかし、アメリカのロジャー・ハートによる子どもの生態地理学的研究¹²⁾に触発され、またイギリスのマシューズ¹³⁾による手描き地図研究の進展を背景にし、わが国においても子どもの心的環境知覚や空間行動の特性に関する基礎的研究が登場してきた。先導的役割を果たしたのは、斎藤 毅による山梨県丹波山村をフィールドにした研究¹⁴⁾であり、絵地図を子どもに提供しつつ、記憶地名を聞き出し、彼らの心像環境の構造を明らかにした。斎藤の手法を東京都心部に居住する子どもに適用し、空間行動との絡みで詳細に報告した岩本広美の研究¹⁵⁾は、現在の筆者の研究姿勢にも連なり、後述するように、子どもの発生的なメンタル・マップ研究の出発点となった画期的なものである。このほかにも、山口幸男による一連の実証研究¹⁶⁾が見られるが、筆者や岩本などの扱う知覚空間とのスケールの違いや研究の視座の質的相違などから、やや関連性は薄い。

わが国の地理学において、子どもの知覚環境研究は、ようやく緒についた感が強い。知覚と行動の乖離¹⁷⁾は未だ明確には見られないものの、研究の進展と共に用いる概念や研究手法も複雑化してくるに違いない。研究すべきフロンティアが広大であるにもかかわらず、研究者の絶対数が極めて少ないのが危惧される。なお、地理学における研究展望については、後述に譲りたい。

(2) 建築学の場合

ケヴィン・リンチが都市住民のイメージを5つの指標（パス、ノード、ランドマーク、エッジ、ディストリクト）から捉えたことは、都市空間が単に物理的な無機質空間でない事実を改めて強調した点で、子どもの知覚環境研究にも強いインパクトを与えた。子どものための遊び場づくりや居住環境調査が、都市を対象とする建築学（環境工学・造園学を含む）で精力的に行われるようになってきたのである。この分野で最も体系的で実証性の高い研究例は、1974年に出版された仙田満による『こどものあそび環境』¹⁸⁾であろう。仙田の研究の特色は、公園や神社、校庭、空き地などの遊び場の名称による表面的な分類でなく、その遊び場を子どもがどのように利用し、実体的空間として機能しているのか、に焦点を当てた点でユニークさが見られる。自然スペース、オープンスペース、道スペース、アナーキースペース、アジトスペース、遊具スペースの六つに分類し、しかもそれぞれの空間内における遊び場空間量の変化や遊び内容・人数、子どもの遊び方の地域ごとの変化を詳細に明らかにした。

建築学の分野では、このほかにも子どもの遊び場所の意味的関連に着目した研究が多く、池田豊彦¹⁹⁾や佐藤・中村ら²⁰⁾、室崎・市岡²¹⁾らによる諸研究が発表されている。大都市がはらむ子どもの遊び空間の問題点について、建築学関連の都市問題研究の分野でも採り上げられ、いくつかの優れた業績も刊行されている²²⁾。

(3) 文化人類学・民俗学の場合

文化人類学においても過去10年あたりから子ども文化の精神構造や諸民族の子ども文化誌が多く記載されてきた。とりわけ、岩田慶治による一連の研究²³⁾は意義深く、1985年に出版された『子ども文化の原像』²⁴⁾は充実した内容となっている。レヴィ・ストロースの『野生の思考』（原著1969年）²⁵⁾以来、文化人類学の持つ構造主義の考え方や参与観察法やロールシャッハ²⁶⁾法の援用による子ども文化の解明は、知覚環境の構造分析にも貴重な示唆を与え、筆者などが取り組んだ相貌的な空間知覚²⁷⁾の問題にも関連が予見できそうである。

子どもをもう一つの異なる民族と位置づけ、オーストラリア原住民アボリジニの子どもの風景観や自然認識について実証研究した窪田幸子の研究も興味深い。臨床心理のテスト法として既に確立しつつあるバウムテストも使った窪田の研究は、子どもが知覚環境の中の諸要素をどのような感情や意味を付して眺めているのかを推測する上で面白いものがある²⁸⁾。

一方、日本民俗学の分野においても子どもと民俗空間との関連を考察した研究がある²⁹⁾。単なる子育てのフォークロアと異なる視角を有する例として岩本通弥による佐渡郡相川町の調査事例は多分に地理学的である。通称地名や子ども独特の空間行動についても言及したこの研究は、心で見る景観を考える上で人文主義地理学と共通点が多い³⁰⁾。今後、都市民俗学などの新領域が開拓されるにつれ、都市問題の一つとしてアプローチする建築学の手法がいわばハードな側面とすれば、民俗学はソフトの領域に貢献することになるだろう。

このほか、発達心理学³¹⁾や児童社会学³²⁾、美術教育³³⁾などの関連分野においても知覚環境に係わる研究例は多く、この研究領域の学際性の高さが伺われる。

3. 子どものメンタル・マップと知覚環境の研究動向

地理学における子どものメンタル・マップ研究について以下に整理してみたい。イメージマップやスケッチマップ、心像環境、知覚空間など、多くの用語がメンタル・マップ(心的地図)研究で使用されているが、ここではその概念上の差異について云々することは避けたい。なぜなら、知覚環境そのものが極めて多義性に富んでいるし、空間スケールや主体である人間の属性の違いなどに加え、その外的表象が地図であるか、映像や画像に近いものであるか、どんな価値判断や趣向が働いているかなど、検証項目が余りに多く、しかも被験者の居住する環境の影響も考慮に入れなければならないからである。そこで本章では、子ども自身が自らの居住地域の手描き地図を描いたケースと、知覚環境形成の重要因子である生活行動や自然認識に係る地理学的研究例を紹介することにとどめたい。

(1) 手描き地図研究

地理学における子どもの知覚環境研究例の中で、最も研究例が多いのがこれである。手描き地図は、3次元の生活空間を2次元の白紙の上に自ら表現する点で、描き手の描図能力の制限やそれ以前の想起時点における頭の中での変換などの無理はあるものの、調査が簡便でしかも個人的で情報量の多い資料が調査者の手に得られるので魅力的な手法の一つであろう。わが国においては、先に述べた岩本が東京都文京区内の小学3年生を対象に地図を描かせ、類型化を試みている³⁴⁾。筆者は、岩本の方法をさらに発展させ、発達段階の異なる合計1,432名にも及ぶ子どもの手描き地図を詳細に分析し³⁵⁾、岩本との比較対照も行った³⁶⁾。手描き地図に描かれた地域空間の範囲や歪みに関する筆者の研究は、後に「動線」³⁷⁾や地理的環境に応じた地図の類型化の研究³⁸⁾にもつながっていった。一般に、子どもが手描き地図として自らのメンタル・マップを表出させる上で、どのような地域事象を想起するか、という問題は場所や景観の認識レベルを考察する際、最も基本的なテーマでもある。日本の子どもの場合、消費生活行動が反映してか、店舗に関する記入が多く、また様々な目的行動の行先である住宅(友だちの家、アパート、病院、銀行など)や目立つ地表物(塔、電柱)の出現割合も高いことが、筆者による熊本県阿蘇谷宮地地区の調査で明らかになっている。さらに、最近、泉貴久によって調査された研究では、広島市旧市内、近郊部、外縁部、島嶼部^{とうしょ}の4地区の子どもが描いた地図では、知覚環境の発達程度に差異が地域ごとで見られたという³⁹⁾。都市化の進展と知覚構造の発達との関連は、今後の興味深いテーマの一つでもあり、生活行動との絡みで知覚環境の発達メカニズムを検討する有効な窓口となるに違いない。

(2) 生活行動研究

子どもの空間行動が、メンタル・マップ形成にどう影響を及ぼしているかについて、岩本が探検行動を例に取り上げている⁴⁰⁾。内発的な行為の一つとして注目される探検は、いわゆるルート・マップからサーヴェイ・マップへと知覚環境が発達する過程にしばしば見られることから、子どもの本能的行為なのかもしれない。「秘密基地」の建設や「子ども道」の利用、通称地名の命名など、子ども独特の空間の主体化は、探検行動と関連する場合も多い⁴¹⁾。探検そのものが、未知の場所への自発的な探索行為を指すのであれば、空間スケール

ルが極めてマイクロな（例えば、屋根裏への探検や自宅の納屋への侵入など）場合から、マクロな（学区から外へ出て行く）場合まで多岐にわたる。狭義に捉えれば、子どもが数キロないし10数キロも遠方まで仲間と遠出する行動を指すと考えれば、メンタル・マップの空間拡大に大きく寄与するであろう。いずれにせよ、探検行動は、メンタル・マップの骨組を強固にし、知覚環境全体を多彩な意味空間へと変容させる契機となることには間違いなさそうである。

生活行動は、生活時間とも重なって検討すべき内容である。通学行動、買物行動、遊び行動（探検行動を含む）などを通して子どもは居住地区内で日常生活行動をくり返す。しかし、現代の子どもたちの生活時間の質的側面は、20年前のそれと大きく変化しており、本格的なケーススタディが望まれる。同時に祖父母、父母、子どもの3世代の変遷を同一地区内で捉える試みを丹念に行うことは、知覚環境の意味的構造を過去と対比することにもつながってくる⁴²⁾。社会学の手法と重なってはくるが、地理的環境との照らし合わせを丁寧に行い、生活時空間の地図化を積極的に進めていくことが地理学に課せられている。

(3) 自然認識研究

子どもに手描き地図を描かせると、怖い場所や不思議な書き込みが見られることがある。それらの多くは、自然との係わりが強く、暗い森やお化けの住む穴、河童がいる川、人が死んだ滝、ヘビの棲み家などという意味空間となっている。山野正彦⁴³⁾や筆者ら⁴⁴⁾が調べた途上国の子どもの事例によれば、フィジオノミック（相貌的）な自然認識が強く感じられ、知覚環境の中で自然空間がいかに大切な作用を及ぼすかが伝わってくる。

相貌的知覚に直接係わらないにせよ、例えば身近な川の魚や昆虫、草花などの生息する場所の認知を調べてみれば⁴⁵⁾、サーヴェイ・マップへと発達する9～10歳の年齢と時期が重なり、メンタル・マップ拡大のきっかけが、自然物採集行動と一致する場合も生じる。また、いわゆる民俗分類研究も興味深いテーマである。知覚空間の面的拡大とは関係せずとも、生き物の分類知識と場所との関連を検討できれば、子どものメンタル・マップの中味がより一層解明されることだろう⁴⁶⁾。篠原徹が研究した⁴⁷⁾、いわば心意の中の動植物研究は、民俗学のアプローチとも言えるかもしれない。

現代日本の子どもたちの知覚環境に大きく欠落している部分は、相貌的知覚をより強めたアニミズム（精霊信仰）的な場所の知覚であろう。魍魎魍魎ちみもりょうや百鬼夜行の世界とまでは行かないにせよ、子どもの知覚環境には、そういった霊的空間が実感できる場所として身近に存在することが望ましいのではないだろうか⁴⁸⁾。なぜなら、子どもの手描き地図の中に、怖い場所の記入が見られる地図の方が、地図としての骨組みがしっかりしているからである。知覚環境は、主体的に意識化できる空間（意味空間）が多いほど構造化の度合いが高いのである。

4. 原風景研究の課題

誰でも自分の幼年期の忘れられない光景を記憶の奥底に沈澱させている。遊び場のシーンや自宅の様子、通学路、野や山などの場所についての記憶、何かの体験の思い出の背景として語ることができるはずである。それが原風景という心理空間なのである。原風景は、人の記憶や物事の本来の姿、未開拓地の景観、あるいは故郷という概念をその言葉の内に

当てはめられる場合が多く、学術的な用語としては曖昧すぎるくらいがあるが、地理的という修飾語を冠に付して、より地理空間の意味合いを強めてここでは使用したい。

(1) 回顧文・自叙伝研究

大学生を対象に幼稚園から小学校時代にかけての地理的原風景や郷土意識の形成という課題を与えて綴らせると実に多種多様の思い出が語られる⁴⁹⁾。身近な昆虫や小動物、草花などの自然物はもちろんのこと、墓地、駄菓子屋、路地、空き地、公園、学校、友人宅、林、小川などの生活空間の諸要素も登場してくる。このことは、子ども時代にこそ環境との間に未分化な状態が顕著であることを暗示している。奥野健男⁵⁰⁾や筆者などが考察した地理的原風景の構成要素は、穴的空間であったり、高所、オープンスペース(田畑)、水辺、犬・へび、抜け道(路地)、静寂であったりするが、なぜそういった意味空間を子ども時代から成人に至るまで記憶していたのかについては不明である。

作家、大岡昇平の自叙伝を分析した筆者の研究⁵¹⁾や大人の中に「内なる子ども」を見出した高田宏⁵²⁾のエッセイ集、中野重治の半自伝小説『梨の花』を細かく読み解いた土田良一の人文主義地理学からの研究⁵³⁾など、文字メディアとして残された作家の地理的原風景には、人間、とりわけ子どもの空間感性の触発源がどのような場所にあるかを示唆してくれる。土田が試作した大学生における原風景の構造図(図1参照)は、荒削りながら中心と周縁あるいは図と地、物語とその背景という喩えが成立する可能性を示している。

地理的原風景に関する研究は、杉浦芳夫が様々な文学作品の中で地理空間を読み解いたように、今後、作者の出身地の風土との関連を一層追求していく作業が期待されている⁵⁴⁾。特に、筆者が子どもの知覚環境研究の一環として着目した童話作家、新美南吉の地理的原風景に関する研究は、児童文学をテキストとして読む試みが魅力的なテーマであることを

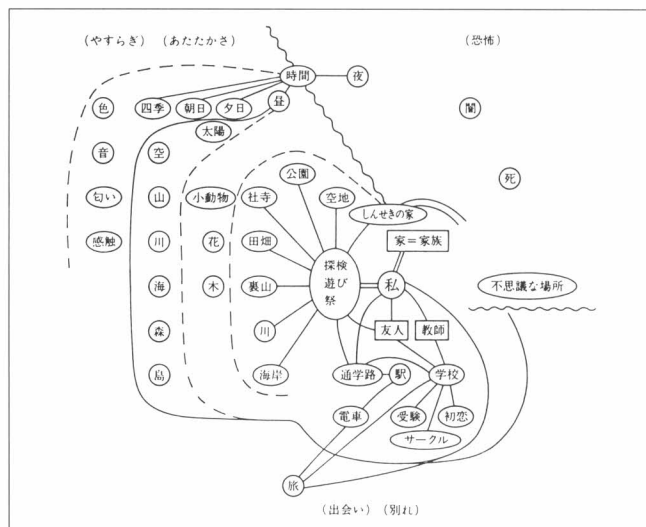


図1 土田が試作した原風景の構造図

出典：白石太良・土田良一共著(1992)：『人文地理—風景・空間・知覚』建帛社，p.26より抜粋した。

示唆している⁵⁵⁾。

ところで、次に紹介する二人の著名な民俗学者の自叙伝も人文主義地理学の観点に立った原風景解明に寄与できそうである。ここでは、柳田国男の『故郷七十年』（昭和34年出版）の中の一節と宮本常一の『民俗学の旅』（昭和53年出版）を資料文として掲載し、地理的原風景の構造研究に有効である点を指摘したい。

資料文 1

この空井戸のある薬師堂は私がいつまでも忘れえない思ひ出の場所でもある。

薬師堂の床下は村の犬が仔を産む場所で、腕白大将の私がいつも見に行くといやでもその匂いを嗅ぐことになった。そのころ犬は家で飼はず村で飼つてゐたので、仔ができる時はすぐに判つた。その懐しい匂ひがいまも在井堂のたたずまひを想起するたびにうつつに嗅がれるやうである。そこから一丁ほど北の方に氏神の鈴の森神社があり大きな楊梅ひまももの樹があつた。一名を明神様ともいひ、村人は赤ん坊が生まれると、みなその氏神に詣でて小豆飯を供へてゐた。その餘りを一箸づつ集まつて来た子供たちのさし出す掌の上ののせるのがならはしであり、村の童たちの楽しみでもあつた。前もつてその日を知つて童たちは神社へ集まつてくるのであつた。母親が「よろしく願ひしますよ」といひながら呉れる一箸の赤飯に私は掌を出したことはなかつた。

出典：『定本柳田国男集』別巻第三、「鈴の森神社」の項、筑摩書房、1971、p. 28より抜粋。

資料文 2

七つ八つから十歳になるころまで、私は何度となく神隠しの話を耳にした。辻川の鈴の森神社は丘陵の傾斜面の一部が段々になつた側にある。その突端で村の者がいつしよになつてお宮を拝むやうになつてゐるので神隠しの話が生まれるのに都合よく出来てゐた。夕方、子供が村のどこかで遊んでみると、白髪のお爺さんが出て来て「我は鈴の森ぢや、家で心配してゐるから、はやう戻れよ」と親切にいはれたから帰つて来たといふ話を子供心に本当のことのやうに思つてゐた。「ああそれは明神さんに違ひない」と大人がいつたような話をいくつもいくつも聞かされた楊句のことだから、小さい私としては無理もなかつたのかと思ふ。

私より三つ年下の弟が生れる春先の少し前であつたから、私の四つの年のことであつた。産前の母はいくらかヒステリックになつてゐたのかもしれないが、私にちつともかまつてくれなかつた。

ある時私が晝寝からさめて、母に向つて「神戸に叔母さんがあるか」と何度も何度も聞いたらしい。母が面倒臭いので「ああ、あるよ」と答へたところ、晝寝してゐた私が急に起き上つて外に出て行つた。神戸に叔母なぞゐなかつたのに、何と思つたか私はそのままとぼとぼ歩き出して、小一里もある遠方へ行つてしまつた。

そこは西光寺野さいくわうじのといふ、開墾場になつてゐて、隣家の非常に有能で勤勉な夫婦者が、ちやうどそこを開墾してゐた。よく働く親爺が「おお、これは隣の子だ」といふので私をすぐに抱き上げて帰つてくれた。帰る途中で逢つた人々が「これはどこの子だい。さつき何だか一人でてくてく歩いて行つたが……。一人でどこへ行くのか知らんと思つたまま声をかけなかつたのだ」と、みなでいつたことを今も覚えてゐる。

それなども、もうちよつと先に行くか、または隣家の親爺さんが畠をしてゐなければ、もうそれつきりになつてゐたに違ひない。

出典：『定本 柳田國男集』別巻第三、「神隠し」の項、筑摩書房、1971、p. 148～149より抜粋。

— 資料文 3 —

父は大阪へ出してもよいと叔父に言っていた。「世の中へ素手に出ていくには身体がもと手であるから、どんな苦勞にも堪えられるようにしておかねばならぬが、一年間百姓させて見てもう大丈夫だと思う。何をさせて見ても一人前のことはできるだろう」そこでその年の四月に大阪へ出ることにした。

出るときに父からいろいろのことを言われた。そしてそれを書いておいて忘れぬようにせよとて私は父のことばを書きとめていった。

(1) 汽車へ乗ったら窓から外をよく見よ、田や畑に何がうえられているか、育ちがよいかわるいか、村の家が大きいか小さいか、瓦屋根か草葺きか、そういうこともよく見ることだ。駅へついたら人の乗りおりに注意せよ、そしてどういう服装をしているか気をつけよ。また、駅の荷置場にどういふ荷がおかれているかをよく見よ。そういうことでその土地が富んでいるか貧しいか、よく働くところかそうでないところかよくわかる。

(2) 村でも町でもあたらしくたずねていったところはかならず高いところへ上って見よ、そして方向を知り、目立つものを見よ。峠の上で村を見おろすようなことがあったら、お宮の森やお寺や目につくものをまず見、家のあり方や田畑のあり方を見、周囲の山々を見ておけ、そして山の上で目をひいたものがあったら、そこへはかならずいって見ることだ。高い所でよく見ておいたら道にまようようなことはほとんどない。

(3) 金があったら、その土地の名物や料理はたべておくのがよい。その土地の暮らしの高さがわかるものだ。(中略)

私にとってはふるさととは生きざまを教えてくれた大事な世界であった。そして郷里を出るとき父が言った「うれしいにつけ、苦しいにつけ、ふるさとのことを思い出せ。困ったときにも力になってくれるのはふるさとだ」という言葉が、その後もずっと心の中に生きた。

出典：宮本常一著『民俗学の旅』文芸春秋、1978、p. 36～58より抜粋。

資料文 1～3 に書かれた回顧文は、それぞれかなり異質の内容であるが、二人の民俗学者の生き方がある意味では良く表している文でもあろう。中国山地の山間の小さな町（辻川）に生まれた柳田の相貌的な環境知覚は、資料文 1、2 を読む限り、既に幼い頃から身に付いていたようである。神隠しの体験などその典型であろう。資料文 3 の宮本の回顧文は、原風景というよりも父親の教えが少年期の宮本の景観の見方を決定づけたことが書かれている。

(2) 画像の研究

回顧文は、文字という言語的コード化を伴う点で、図的あるいは画像表現に比べて不十分な側面がある。地理的原風景をスケッチさせる「原風景画」の検出方法は、文章表現力が乏しい被験者をカバーする上でも有効であろう。図 2 と図 3 の原風景画の事例は、「幼い頃の怖い場所体験」について大学生（19歳）に描かせたものであるが、スケッチを補う解説文と合わせて読めば、興味深い点が判明してくる。両図とも自宅周辺の地形や植生、あるいは恐怖体験の時間が関与していると推察されるのである。城跡や観音様という意味的要素が沈澱している場所の存在も見逃せない。画像の分析枠組は、手描き地図以上に難しい面が多いが、個人空間の個性的側面がリアルに描写されやすいので魅力ある研究対象と言えるだろう。

このほかにも、漫画やアニメーション⁵⁶⁾、映画、絵画、模型(箱庭)⁵⁷⁾など、画像的資料は作者の原風景再現にとって格好の資料となり得る場合がある。

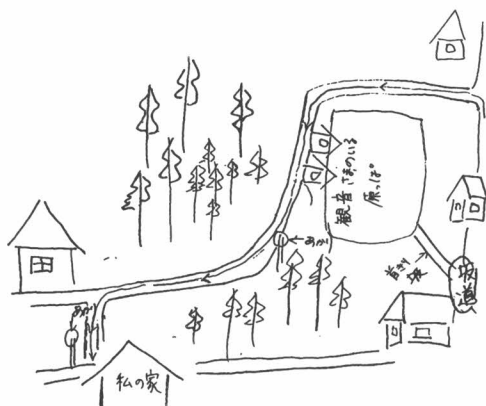


図2 大学生が描いた怖い場所体験の原風景画(その1)

上図スケッチに加え、次のような解説文が書き添えられた。

「小学校の頃、学校から帰ってくる時、うすぐらい時間だと家の前の林の道がこわかった。あかりがある所から、次のあかりまではうすぐらく、林の中だから、ひんやりした感じがしていつも背中の方に気配を感じてドキドキしながら歩いていた。今もその道は暗くなると同じ感じがする。その家に帰ってくる途中に長い坂道があり、昔原っぱで罪をおかした人の首を切り、それがその坂をころがっていったことから首切り坂と呼ばれている場所がある。」中京大学1年生、女子による
1993年5月調査。



図3 大学生が描いた怖い場所体験の原風景画(その2)

「佐和山の城跡一带には、関ヶ原の戦いにやぶれた石田軍の怨念を持った霊がいる」との見方でこのスケッチは描かれている。

中京大学1年、男子の例。

5. 研究の展望

地理学における子どもの知覚環境研究のフロンティアについて、二、三提起しておきたい。地理を識る基本的な思考や体験が、子どもの知覚環境形成の中に隠されているかもしれない。土地を歩き、土地を感じ、そして新たな未知の土地へ出ていくという営みが地理学を発達させてきたのであれば、子どもの探

検行動や様々な空間利用、命名、相貌的知覚などの行為や認識について検討する試みは、地理学の持つ基本テーマを再考することにもつながる⁵⁸⁾。知覚環境をいかに表出させるかという方法論が目下の課題でもある。また、地図や文章、画像の形でうまく表出できたとしても、それらを分析する枠組が未だ確立していない。子ども研究の未開拓地は極めて広大である。

(1) 写真投影法の採用

精神医学者である野田正彰が『漂白される子供たち』の著書⁵⁹⁾の中で、採用したのが、写真投影法である。これは、被験者である子ども自身にカメラを持たせ「1日の生活、および好きなもの」というテーマで写真を撮影させる方法であり、撮影対象やアングルを分析することで、子どもの心理解明に取り組む研究である。

地理学においても手描き地図と併用して採用すべき手法かもしれないが、既に建築学の若手研究者、久隆浩によって最近試みられている。久の研究では、大阪の都心部と近郊の各々2校の小学生(第5学年計118名)を被験者とし、使い切りカメラを子どもに持たせ「1日の生活で、好きな場所や嫌いな場所」というテーマを与えて自由に撮影させている。写

された写真の構図や内容で特徴的なことは、郊外部の子どもたちが写してきた写真には人の姿がほとんど写っていないこと、また公園や店舗の全景を写している例が多く、それに比べて都心部では、店舗内の様子や店舗に集まる子どもの姿など人間の活動風景が多く写されていたという⁶⁰⁾。地理的環境の違いと知覚環境の質的側面との関連を考える上でも、久の研究は興味深い。

(2) 時間地理学とのセッティング

子どもの生活行動を時間地理学的手法で分析することも残っている課題である。筆者も試みに愛知県内の農山村で実施したこともあるが、成人の場合に比べ空間移動の量が小さく、しかも平日は通学行動に拘束されており、休日においても獲得する交通手段が限られているため、時空間図に大きな変化が見られないことがネックとして指摘される。

しかし、現代の都市の子どもにとっては、時間の重要性は増しており、時間と空間を共に消費する一人として子どもの生活も視野に入れる必要があろう。とりわけ、遠方への通塾行動や休日に家族と共に遠出するレジャー行動の行先は、かつての子ども社会には見られない程の距離的拡大を生活空間内にもたらしめている。それによって、都市の子どもの知覚環境は、自宅周辺のごく狭い空間と小学校まで至る通学路沿いの空間に身近な心像環境は閉じられ、その外縁部はるかに遠く、塾やショッピングセンター、遊園地などの熟知する場所が点在するという歪な形態になっているに違いない。「バス」や「ブリズム」、「ステーション」、「制約」、「ルーチン」といった新しい概念を駆使して、子どもの生活空間を表現し、現代社会に生きる子どもの知覚環境を明らかにしなくてはならない⁶¹⁾。

(3) 学校教育の影響

日本の子どものように、生活の中で学校という世界が大きく占める国では、どうしても知覚環境形成と学校教育との関係を見捨てることはできない。大半が通園する幼稚園においても、園外保育という形で積極的に野外へ幼児を連れ出す機会も多く、小学校においては低学年の生活科という教科がとりわけ校外へ出歩く学習が多い。生活科学習をきっかけにして、子どもの探検が活発化したり、知覚環境の中のメンタル・マップがしっかりとした形態になる場合もある。筆者が調べた限りでは、ザリガニを獲得するために遠くの用水路まで遠出したり、身近な街の探検学習とその後の地図作成によって、子どものメンタル・マップが整理されたケースが見られる。相貌的な知覚を重視し、子どもの遊び行動の伸長を積極的に容認する生活科学習は、わが国の全ての児童に影響する公教育であるため、もっと注目する必要がある⁶²⁾。

都市部の小学生と農山村部の小学生を比較して、各々が生活科学習によってどんな知覚環境が新たに生じたのか、地域の自然や社会環境の何が影響したのかを調べることは優れた地理学的な研究テーマである。

6. お わ り に

本稿では、わが国における子どもの知覚環境研究の動向を主にメンタル・マップ研究と地理的原風景の研究動向の二面から整理してみた。知覚と行動の両面についても関連的に扱い、しかも場所の知覚を人文主義地理学の見方を採用しつつ論じてみた。

子ども研究は、地理学においても魅力的なジャンルであるにもかかわらず、その実証研究は極めて少ないのが現状である。地理教育論との係わりも十分考えられるが、子ども独特の知覚世界に研究という知的な探検を試みる行為も面白いものがあるだろう。その際、建築学や文化人類学、心理学などの先行研究を活用することも忘れてはならない。研究の視角は異なっても研究対象としての子どもの同じだからである。今後、一人の子どもの丹念な追跡調査（縦断的方法）や異なる地域空間におけるモノグラフを積み重ねることで、子ども研究は地理学においても大きく開花する余地があるに違いない。本稿が、そうした研究のささやかな道標^{みちしるべ}になれば幸いである。

〔謝 辞〕

本稿を長年ご指導頂いた東京学芸大学の斎藤毅教授と千葉徳爾先生（元筑波大学教授）に謹呈致します。また、日頃、ディスカッションの相手になって下さった岩本廣美氏（奈良教育大学）と吉松久美子氏（大東文化大学）にも記して感謝の意を表します。

注および文献

- 1) K. リンチ著、丹下健三・富田玲子訳（1968）：『都市のイメージ』岩波書店、276p. なお、次の内田による研究は本稿とも関連深い。内田忠賢（1991）：知覚環境論の人文主義的再検討——K. リンチ研究——、高知大学学術研究報告（人文科学分冊）第40巻、pp. 149～156。
- 2) ケヴィン・リンチ編著、北原理雄訳（1980）：『青少年のための都市環境』鹿島出版会、201p.
- 3) ロジャー・M・ダウンス、ダビッド・ステア共編、吉武泰水監訳 曾田忠宏・林章他共訳（1976）：『環境の空間的イメージ——イメージマップと空間認識』鹿島出版会、470p.
- 4) イーファー・トゥアン著、小野有五・阿部一共訳（1992）：『トポフィリア——人間と環境』せりか書房、446p.
- 5) イーファー・トゥアン著、山本 浩訳（1988）：『空間の経験——身体から都市へ』筑摩書房、360p.
- 6) 既に一部分の文献については、次の展望論文がある。岩本広美・安藤正紀・寺本潔・吉田和義・松井美佐子（1985）：子どもの心理的発達に関する地理学的研究——子どもの知覚・認知・心像をめぐる英米の研究動向を中心にして——、新地理第33巻第2号、pp.28～39。
- 7) グールド・ホワイト著、山本正三・奥野隆史共訳（1981）：『頭の中の地図——メンタルマップ——』朝倉書店、192p.
- 8) 千田稔訳編（1981）：『論集 地図のかなたに——論集景観の思想』地人書房、272p.
- 9) 岩戸栄・佐島群巳（1977）：小学校における空間認識の発達に関する研究——スペースの異なる地図表現の場合——、地図第15巻第2号、pp. 23～32。
- 10) 須田坦男（1969）：『幼稚園・小学校における子どもの空間概念形成に関する研究——地点理解とその発達段階——』昭和44年度文部省科学研究費奨励研究B報告書（非売品）、39p.
- 11) 松本博之（1989）：環境と認識——生態学的アプローチと人間主義的アプローチ——、大島襄二ほか編著『文化地理学』古今書院、pp. 117～146 所収。
- 12) Hart, R. (1979) : *Children's experience of place*, Irvinton Publishers, Inc., New York, 518 p.
- 13) Matthews, M. H. (1980) : The mental maps of children —— images of Coventry's city center ——, *Geography* 65, pp. 169～179. Matthews, M. H. (1984) : Environmental cognition of young children : images of journey to school and home area, *Trans. Inst. Br. Geogr. N. S.* 9, pp. 89～105.
- 14) 斎藤毅(1978) : 児童の「心像環境」と世界像に関する方法論的一考察, 新地理第26巻第3号, pp. 29～38.
- 15) 岩本広美 (1981) : 子どもの心像環境における「身近な地域」の構造, 地理学評論第54巻第3号, pp.

- 127～141。
- 16) 山口幸男ほか (1987)：自県付近に対する生徒の空間認知——空間認知に及ぼす県境の影響——，群馬大学教育実践研究第4号，pp. 87～98。などが見られるが，子どもの身近な居住地域との関係を考察した論稿は少ない。
 - 17) 筆者の立場は，子どもの環境知覚は具体的な野外への出歩き方の如何によって変化してくるとの考えに立っており，知覚と行動を別個には捉えていない。
 - 18) 仙田満 (1984)：『こどものあそび環境』筑摩書房，335p. 仙田満 (1992)：『子どもとあそび』岩波書店 (新書版)，205p.
 - 19) 池田豊彦 (1984)：子どもの立場からの遊び場所の分類——遊び活動における子どもと場所の意味的関連性から——，日本建築学会論文報告集第346号，pp. 181～188。この論文では，東京近郊の住宅地域をフィールドに，子どもの遊びを撮影した約3500場面の写真を分類している。
 - 20) 佐藤丘・中村攻 (1986)：子どもの遊びに供される地域空間に関する研究，造園雑誌第49巻第5号，pp. 245～250。
 - 21) 室崎生子・市岡明子 (1989)：子どもの遊びの成立にかかわる空間の構成要素と性質に関する研究——京都市内での事例分析から——，日本建築学会計画系論文報告集第405号，pp. 117～127。
 - 22) 鳴海邦規編著 (1988)：『景観からのまちづくり』学芸出版社，246p. や山本清祥編 (1992)：『大都市と子どもたち——遊び空間の現状と課題——』日本評論社，287 p.，雑誌『都市問題』(東京市政調査会発行) 1992年12月号第83巻第12号 (特集：都市における子ども空間) などがある。
 - 23) 岩田慶治 (1982)：「原風景」の構図，季刊人類学第13巻第1号，pp. 125～131。岩田慶治著 (1992)：『日本人の原風景——自分だけがもっている一枚の風景画』淡交社，182p.
 - 24) 岩田慶治編 (1985)：『子ども文化の原像——文化人類学的視点から』日本放送出版協会，804p.
 - 25) C., レヴィ・ストロース著，大橋保夫約 (1976)：『野生の思考』みすず書房，410p.
 - 26) 藤岡喜愛 (1974)：『イメージと人間 精神人類学の視野』日本放送出版協会 (NHK ブックス)，203 p.
 - 27) 山野正彦 (1989)：相貌的思考に向かって——眼と景観の相互浸透，季刊 iichiko, No. 11, pp. 38～68。
 - 28) 窪田幸子 (1988)：文化としての風景——オーストラリア・中央砂漠アボリジニの風景画——，季刊人類学第19巻3号，pp. 3～47。窪田幸子 (1991)：オーストラリア・アボリジニの木のイメージ——バウムテストの人類学的考察——，国立民俗学博物館研究報告別冊15号，pp. 365～378。
 - 29) 飯島吉晴 (1991)：『子供の民俗学』新曜社，258p.
 - 30) 岩本通称 (1990)：新潟県佐渡相川町における環境教育，環境教育研究会 (代表・加藤秀俊) 編『文化教育としての環境教育の総合的研究』(日本生命財団特別助成研究最終報告書) 第2分科会報告第2章 pp. 93～141所収。
 - 31) 谷直樹 (1980)：ルートマップ型からサーヴェイマップ型へのイメージマップの変容について，教育心理学研究第28巻第3号 pp. 19～28。竹内謙彰 (1987)：空間におけるオリエンテーションの発達——文献展望——，京都大学教育学部紀要第33号，pp. 133～145。別府哲 (1990)：道順描画課題における経験の系列的組織化の発達，岐阜大学教育学部研究報告 (人文科学) 第38巻，pp. 181～196。竹内謙彰 (1993)：幼児における探索的行動と空間能力との関連，愛知教育大学研究報告第42輯 (教育科学)，pp. 111～118。
 - 32) 藤本浩之輔著 (1974)：『子どもの遊び空間』日本放送出版協会 (NHK ブックス)，245p.
 - 33) 井手則雄 (1975, 76)：児童画における空間表現の発達と指導(1)(2)，宮城教育大学紀要第10・11巻，pp. 23～33, 25～39。
 - 34) 前掲15)。
 - 35) 寺本潔 (1984)：子どもの知覚環境の発達に関する基礎的研究——熊本県阿蘇谷の場合——，地理学評論第57巻，pp. 89～109。
 - 36) 寺本潔 (1984)：子どもの手描き地図からみた「身近な地域」の構造化——岩本 (1981) との比較を通して——，地理学報告 (愛知教育大学) Vol. 59, pp.1～8。

- 37) 岩本廣美 (1990) : 小学校における地図の使用——「動線」の概念をめぐって——, 地理科学第45巻第3号, pp. 120~127.
- 38) 寺本潔・岩本廣美・吉田和義 (1991) : 子供の手描き地図からみた知覚空間の諸類型, 愛知教育大学研究報告 (人文科学) 第40輯, pp. 95~110.
- 39) 泉貴久 (1993) : 近隣空間における児童の知覚環境の特性とその発達——広島市を事例として——, 地理科学第48巻第1号, pp. 33~52.
- 40) 岩本広美 (1980) : 子どもの探検行動と知覚空間, 地理第25巻第11号, pp. 52~62.
- 41) 寺本潔・大井みどり (1987) : 近隣における子供の遊び行動と空間認知の発達——愛知県春日井市の場合——, 新地理第35巻第2号, pp.1~20. 寺本潔著 (1988) : 『子ども世界の地図——秘密基地・子ども道・お化け屋敷の織りなす空間』黎明書房, 176p.
- 42) 寺本潔 (1993) : 子どもの知覚環境と遊び行動——人文主義的地理学からのアプローチ——, 国立歴史民俗博物館研究報告第54集, pp.5~52.
- 43) 山野正彦 (1985) : 子どもの空間知覚——スリランカと日本の調査事例から——, 前掲24) pp. 37~63所収.
- 44) 寺本潔・吉松久美子 (1988) : 手描き地図にみる子供の相貌的な環境知覚——日本とタイの山村の比較調査を事例として——, 地理学報告 (愛知教育大学) Vol. 67, pp. 21~34. 寺本潔著 (1990) : 『子ども世界の原風景——こわい空間・楽しい空間・わくわくする空間』黎明書房, 248p.
- 45) 寺本潔・松田幸一 (1986) : 川の魚・昆虫・植物に関する子どもの認識と遊び——愛知県津具小学校の事例——, 愛知教育大学自然観察実習園報告 No. 6, pp. 15~26.
- 46) 寺本潔 (1988) : 描画にみる子供の感情と自然認識——愛知県津具村の小学生の調査事例をもとにして——, 愛知教育大学自然観察実習園報告 No. 8, pp. 13~21. 寺本潔 (1989) : 子供の手描き地図にみる景観及び動植物の描写について——日本とタイの農山村に住む小学生の事例をもとにして——, 愛知教育大学自然観察実習園報告 No. 9, pp. 11~19.
- 47) 篠原徹著 (1990) : 『自然と民俗——心意のなかの動植物』日本エディタースクール出版部, 256p.
- 48) 常光徹著 (1993) : 『学校の怪談——口承文芸の展開と諸相』ミネルヴァ書房, 403p.
- 49) 寺本潔 (1986) : 大学生の回顧文にみる地理的原風景の構造, 地理学報告 (愛知教育大学) Vol. 62, pp. 36~43.
- 50) 奥野健男 (1972) : 『文学における原風景——原っぱ・洞窟の幻想』集英社, 226p.
- 51) 寺本潔 (1985) : 自叙伝からみた大岡昇平の地理的原風景, 地理学報告 (愛知教育大学) Vol. 61, pp. 57~64.
- 52) 高田宏著 (1993) : 『子供誌』新潮社.
- 53) 土田良一 (1990) : 「良平」の世界像——地理教育との関連——, 鹿児島県短期大学研究紀要第45号, pp. 29~52.
- 54) 杉浦芳夫著 (199) : 『文学のなかの地理空間——東京とその近傍』古今書院.
- 55) 寺本潔 (1993) : 童話作家, 新美南吉の地理的原風景——作品「家」を中心にして——, 地理学報告 (愛知教育大学) Vol. 76, pp.7~17.
- 56) 例えば, 妖怪漫画で知られる水木しげるの原風景と作品との関連やアニメ『となりのトトロ』なども研究対象として興味深い。
- 57) 河合準雄編 (1969) : 『箱庭療法入門』誠信書房, 144p. などは, 原風景と関係がある分野と思われる。
- 58) 寺本潔 (1993) : 私はなぜ子ども研究を行ったのか, 小学館教育編集部「幼児と保育」編『乳幼児保育研究会講演記録集 (平成4年度日本児童教育振興財団助成)』pp.2~30所収 (非売品)。
- 59) 野田正彰著 (1988) : 『漂白される子供たち』情報センター出版局, 152p.
- 60) 久隆浩・鳴海邦碩 (1992) : 子どもと地域投影法の試み, 第27回日本都市計画学会学術研究論文集, pp. 715~720.
- 61) 荒井良雄・川口太郎・岡本耕平・神谷浩夫編訳 (1989) : 『生活の空間 都市の時間』古今書院, 247p. の中に取められたソルヴェイグ・モルテンソンの論文「子供時代の環境と時間の編成」(pp. 61~97所収, 岡本訳出) は参考になる。

- 62) 寺本潔著(1991)：『自然児を育てる——生活科を起爆剤にして』農文協，146p. 寺本潔著(1993)：『感性が咲く生活科——授業展開の道標〔たんけん・ひみつ・じまん〕』大日本図書，213p.

補追

本稿脱稿後に、岩本(1993)及び野中(1993)を得た。関連する内容が多いため末尾に加えたい。

岩本廣美(1993)：子どもの手描き地図研究の意義と方法，地図(子どもと地図特集号) Vol. 31 No. 2, pp.1~7。

野中健一(1993)：大学生の原風景にみる生活環境の中の自然，環境教育 Vol. 3 No. 1, pp.2~18。

(平成5年9月1日受理)